



ついでとうてんかいかいしま
▲追悼展開会式

みやこ 宮古・沖縄展覧会ツアー

ピースクラブ通信

No.14

発行 社会福祉法人 ピースクラブ
住所 〒556-10014 大阪市浪速区大國1丁目1-11
連絡先 TEL&FAX 06-6664712077
Eメール peaceclub@st2.dion.ne.jp

新ピースのオープンの際の3人展の1人で、一昨年に亡くなった潮平紀子さんの追悼展が5月27日から6月1日まで、那覇市の総合ビル、パレットくもじ6階にある那覇市民ギャラリーで開かれた。昨年3月、紀子さんのおうちに友人たちが集まり、そのときの話が一年以上掛かって実現したもの。またそれに先立って5月18日から23日まで、宮古島の朝子さん宅のお向かいのカフェ373で、私の作品の展示もあり、ピースクラブから5つのツアーが組まれた。宮古展の始まる10日前に私は肺炎とかで緊急入院して

しまい、朝子さんとカフェのオーナーの比嘉さんに心配をかけたが、6日目に何とか病院から脱出して、16日、予定通り河栄・松瀬班10人と一緒に出発、夕方宮古に着いた。
翌日は絵の飾り付け、夕方2陣の岸本、奥山、弘子さんが加わり、地元の障害児やおかあさん方との交流会があり、にぎやかに過ごした。
18日から宮古展の開会。ところが前日から来ていた石垣の友人にご家族の訃報が入り、朝早く帰るといって波乱の幕開け。でも会場は

ピーコラ

潮平紀子さんと始めて会ったときの印象はいかにもキュートな沖縄娘というものだった。94年に最初に沖縄を訪ねたとき、当時土の宿にいた朝子さんと一緒に紀子さんのおうちを訪ねて作品を観た▼
キャシャなからだのどにと思われぬ力でねじ伏せるような絵だ。添えられる言葉もキラリと光る。ご両親の手にある作品でも180点余。今回その3分の1が飾られた▼
会期中、ちよっと抜けさせてもらって新しく出来た沖縄県立美術博物館に行った。長野にある無言館から戦没画学生の絵が来ていた▼
絵が描きたいという無言の叫びに満ちた絵。それを観ながら、紀子さんは先に逝ってしまったけれど、自分を含めて描きたい絵を思い切り描けた人生はとて幸せな人生といえるだろう。
(昔)



▲紀子さん遺影

沖繩タイムならぬ時間からお客様があり、滑り出しは順調。19日には第1陣が帰る。大人数であわただしく、どれだけ楽しめたか？

2日目に地元の新聞とテレビの取材がある。翌日から新聞を見たというお客様が多くなった。新聞に載った近所の子供たちの感想が的確なのに驚く。20日、これからしばらく朝子さんの元で暮らす弘子さんを残して、岸本、奥山が帰る。入れ違

いに21日、さゆりさんと山口ヒロミさんが来訪。

23日に宮古展が終わり、翌日作品を撤収、梱包して一部を那覇の追悼展に送るが、これがまたひと騒動、危うく作品を送れないところだった。24日の夕方は岳の誕生日の食事会だったのだが、そこで弘子さんの様子が急変し、それから過酷なバトルが始まった。26日に追悼展のために5人はふた手に分かれて那覇に移

動の予定だったのに、朝子、弘子、晋作組は空港に着いてから飛行機が別である事が発覚。アクシデントも重なって、結局その日は中村1人が那覇に行き、すでに会場の設営のために来ているかじ春グループと合流、朝子さんは翌朝いちばんの飛行機でやってきた。

朝子さんはそれから29日まで追悼展を手伝い、弘子さんと宮古に、さゆりさんとヒロミさんは大阪にそれぞれ帰り、中村は小端さんと残った。30日、小端さんと入れ替わりに岸本河野班が到着。31日だけ、行動を共にし、沖繩村や公設市場に行つた。

心残りは連絡の不手際で追悼展の後片付けに、大阪組が参加できなかった事。本当に申し訳ない。追悼展

はよく準備され、入場者も1200名を越えて盛会だった。

今回の報告はあらずじだけの予告編のようなもので、次の機会に誰かに詳しく書

いてもらおうと思つている。自分が体験しただけでもスリルとサスペンスに充ちた旅だった。

(報告・中村)



▲交流会

三線センセイの

キューバ滞在記(2)

酒井さとえ

1年のキューバ滞在を終え、3月に大阪に戻ってきました。4月からは再び、ピースクラブの三線教室にも復帰し(この一年間、先生役をつとめてくれた中間さん本当にありがとう、教室の皆さんも!)、また私の日常に戻ろうとしています。再びキューバ報告をまとめて欲しいと頼まれ、あの不思議な国の何を伝えればいいのか途方にくれもするのですが、私がキューバで最初につくった友達の話を書くことにします。

06年の夏に一年の滞在の下見として1ヶ月間ハバナで過ごしたとき、私が滞在した民宿(キューバではカサと呼ぶ)の下にある道で彼

は車の窓ふきの仕事をしていました。その仕事っぷりが良かった。車におずおずと近づきながら、渾身の力をこめて窓を丁寧にふき、運転手の横に控え目になつた。運良くお金がもたらえたときには運転手にむかつて軽くガッツポーズをしてみせるのだ。当然ながらもらえないことも多い。社会保障が手厚いとされ、ほぼ全ての国民が「公務員」というキューバでこのような「仕事」を見たのは初めてだった(後の一年間の滞在中で数度見る事があつたけど彼のような仕事っぷりではなかった)。彼の存在に気づいてから、ほぼ毎日、窓から下を見続けた。いつも一人で道ばたに立ち、誰と話すでもな

い彼(無口なキューバ人というの少し意外だった)の前をある日、犬を連れた物乞いの老人が通り話しかけた。すると彼は自分のポケットから窓ふきで儲けたいくらかの金を渡し、固く握手をしたのだ。キューバ人がキューバ人にお金を恵む、そんな姿を見たのも初めてだった。私は好奇心を押さえきれず、ある日、水とお菓子を持って彼の所に行つてみた。しかし、恥ずかしくて水とお菓子を押しつけるように渡すのが精一杯だった。しかし、いろいろなこと聞いてみたい。次の機会をねらい、思い切つて尋ねてみた。「家はどこ?」「それが仕事?」すると彼は一言も発さず、ただうなづき、家の方角らしき所を指さしただけだった。その後、帰国までもう一度彼と話をする機会はなかった。

07年4月、私は1年の滞在予定でハバナの同じカサに戻った。そのときにはもう彼の姿はそこにはなかった。しかし3週間ほど過ぎた頃、初めに彼を見つけた道で再び彼に会つたのだ。そのときの彼はバルケアドールと呼ばれる駐車係の制服(といつてもキューバの有名なラム酒「Havana Club」のロゴが入った赤いベストだけなのだけ)を着ていた。思いがけない再会に迷わず「私のこと覚えてる?」と話しかけ、彼は私のキューバで初めての友人になった。名前はマイケル。話してみると非常に吃音が強く、ただでさえス

ピースクラブの織物

上田 友子

「織物の手ほどき」ということでピースクラブに寄せていただくよになつて、もう六年になるだろうか。木、金曜日の午後、織ることの好きなメンバーが待機している。いわゆる「さわり」と呼んでいる高機の手織機を用いた平織を中心にした創作活動である。

(つづく)

ピースの誰彼も体験した中で織物が大好きな何人かはずっと続いている。糸運びから始めて、織る状態にするまでのむつかしい工程も楽しくこなし、織り上がる喜びを満喫している。

何を織っているかという点、マフラー。これは織り上げて少し仕上げをすれば即、実用に供せる。次に反物。何色も糸を使って彩りが工夫でき、織手にとっては一番楽しいものだが、身の回りの作品に仕上げなければならぬ。それには他の協力が必要である。これまで、とおる君のお母さんにぬいぐるみ、かばんなど諸々の小物に仕上げていただいた。現在の主要作品は「お守り袋」のための六センチ巾の帯状の反物である。織物は巾が細いほど難しいし「お守り袋」の規格が要求される。これを織るときはいつも生産性の自覚を持ってもらっている。

人からよく「ピースクラブ」ってどんな所？」と尋ねられる。理念や全容を私は十分に理解できていないので、ひよっとしたら間違っで説明しているかもしれない。しかし、ピースクラブは開かれた場所であると実感している。最近、ピースのメンバー以外の一般の方が四人も織りに来ておられる。それは非常にお互いに学びあい、刺激しあい、明日への可能性を導き出すものである。

ごく皮相的な織物の紹介に終ったが、後期高齢者というレッテルを貼られた私は、ピースの行事に参加させていただき、若い世代と対等に交流させていただき、エネルギーをいっぱいもらっている。そして孤独に老いないようにしようと、自分を励ますのである。



▲さをり